

審査論文要旨

論文提出者氏名： 岡田 拓朗

審査論文

題名： Carboplatin and docetaxel in patients with salivary gland carcinoma: a retrospective study

(唾液腺癌に対するカルボプラチン、ドセタキセル併用療法の後方視的検討)

著者： Takuro Okada, Takashi Saotome, Toshitaka Nagao, Tatsuo masubuchi, Chihiro Fushimi, Takashi Matsuki, Hideaki Takahashi, Kouki Miura, Kiyooki Tsukahara, Yuichiro Tada

掲載誌： in vivo 33: 843-853, 2019.

【背景】

再発転移唾液腺癌に対する標準的な化学療法は確立していない。過去にはシスプラチンを含む治療法の報告が散見される。本研究の目的は、シスプラチンよりも毒性が少ないとされるカルボプラチンと、過去の報告の少ないドセタキセルとの併用療法について、効果と安全性について検討することである。

【対象と方法】

2011年から2018年の間に再発転移唾液腺癌に対してカルボプラチン、ドセタキセル併用療法を行った症例を後方視的に解析した。カルボプラチンは AUC 5、ドセタキセルは 70mg/m² で day1 に投与し 3 週毎に最大 6 コース投与した。治療効果判定は Response Evaluation Criteria in Solid Tumors version 1.1 (RECIST 1.1) を用いて行った。有害事象の評価は Common Terminology Criteria for Adverse Events (CTCAE) ver4.0 を用いて行った。対象例について病理組織像の解析も行った。生存率の解析は Kaplan-Meier 法を用いた。

【結果】

対象は 24 例であった。観察期間は中央値 19.7 か月(範囲 2.2~64.3 か月)であった。組織型は唾液腺導管癌 12 例、腺癌 NOS 4 例、筋上皮癌 3 例、腺様嚢胞癌、粘表皮癌、腺房細胞癌、基底細胞腺癌、低分化癌が、それぞれ 1 例であった。24 例中 18 例 (75%) で 6 コースの投与が完遂できた。治療効果は CR 2 例、PR 8 例、SD 9 例 (long SD 3 例)、PD 5 例で奏効率は 41.6% (10 例) であった。病理組織別に最も症例数の多かった唾液腺導管癌では、CR 2 例、PR 4 例、SD 3 例 (long SD 1 例)、PD 3 例で、奏効率 50.0% (6 例) であった。全症例での progression-free survival 中央値は 8.4 か月、overall survival 中央値は 26.4 か月であった。

Grade 3/4 の有害事象として、好中球減少、貧血が約 20~30% の症例で認められたが、管理は可能であった。

【考察】

再発転移唾液腺癌に対し、カルボプラチン、ドセタキセル併用療法は一定の効果があり、認容性も高く、治療選択肢の一つとなりうると考えられた。